様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５３１１３５

研究課題名（和文）困難を有する若者への「社会的スキル」形成の実践に関するエスノグラフィー研究

研究課題名（英文）Ethnography about practice of making "social skill"in at risk youth

研究代表者
古賀　正義（KOGA, MASAYOSHI）

中央大学・文学部・教授

研究者番号：９０１７８２４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　排除型社会が進行するなかで、非行やひきこもりなど社会適応できない「困難を有する若者」をどのように包摂するかが問われている。とりわけ、対人関係不安やコミュニケーション能力の改善は社会関係資源の獲得にとって重要な課題であり、「社会的スキル」の育成を求める心理学的技法に基礎を置く多様なプログラムが支援施設や高校で急速に広がりつつある。
　本研究は、こうしたスキルトレーニングに密着し、その有効性と問題点をエスノグラフィックに分析した。実践活動の方法論を検討するため、具体的には、困難高校生徒・卒業生の調査、ティーンコート等非行傾向の若者の調査、ＮＰＯ団体等参加者のスキル学習の調査、を行った。

研究成果の概要（英文）：The inclusion of "at risk young person" who cannot do the social adjustment in the exclusion type society is asked. Especially, an uneasy interpersonal relationship and the improvement of communications skills are an important problems for the acquisition of the resource related to the society. Therefore, various programs that put the base on a psychology technique for requesting the promotion of a social skill are extending rapidly in the support facilities NPO and the low ranked high school.
The present study paid attention to such skill training and by ethnographic approach analyzed the effectiveness and the problem. To examine the methodology of hands-on activities, the study of social skill was done. The investigation is as follows. 1) the student of a difficult high school, 2) the young person of the delinquency tendency, such as the teen courts, 3) the young person jointed NPO groups and that suppourt program.

研究分野：教育社会学

キーワード：キャリア教育　教育困難高校　社会的スキル　エスノグラフィー　ティーンコート　支援NPO　問題の社会化　排除型社会

１．研究開始当初の背景

排除型社会が進行するなかで、非行やひきこもりなどの傾向を示し社会的に適応できない「困難を有する若者」をどのように社会的に包摂するかが問われている。とりわけ、対人関係不安やコミュニケーション能力の改善は社会関係資源の獲得にとって重要で困難な課題であり、「社会的スキル」の育成を求める心理学的技法に基礎を置く多様なプログラムの実践が、支援施設や学校・教育機関で急速に広がりつつある。

本研究は、こうしたスキルトレーニングの多様な現れに密着し、その有効性と問題点をエスノグラフィックに分析しつつ、社会参加・自立に向けた実践活動の方法論を広範に検討していきたいと考えた。

この研究では、これまでの困難の原因を性格や資質あるいは意欲など個人の内面に求め、原因探しや改善方法探しにのみ没頭する姿勢ではなく、本人の置かれた現在の家庭状況や社会環境に即応しながら、支援ネットワークによる社会参加への具体的な働きかけを繰り返すことが必要とされていることを指摘したい。

いうならば、問題の「個人化」から「社会化」への認識の転換であり、イギリスをはじめ青少年問題を抱える先進諸国では具体的な包摂の取り組みや実践活動がスタートしていると指摘されてきた(小長井賀興 2009)。相談活動に特化し個々人に対する丁寧なケアリングを重視してきたわが国の支援のあり方にも、「社会化」という視点からのリニューアルが求められている。

２．研究の目的

すでに提起したように、若者の社会参加を疎外する一因として、他者とりわけ大人世代や見知らぬ者との社会関係がうまく取り結べないことを指摘する意見は根強い。情報化社会の進展や成熟拒否の気分などを背景として、対面的なコミュニケーションが重く感じられるようになり、限られた親密な仲間とのキャラ化した関係を維持することが大切になっているといわれる（土井隆義 2010）。

実際、当事者である若者自身が、「コミュ障」や「ヨッ友」などという言葉を使って、仲間関係が困難な人の性格や薄く広くなってしまう態度に対して、「不安」を訴えることも多くなっている。さらに進めば、あらかじめ「不安」を訴えておくことで予防線を張り、周りの他者からの関係づくりの期待水準を下げようとする戦略的な傾向さえ生じるとされる。そのため、多くの施設や学校でも、対人関係の能力を伸長させる実践的方法を模索していかざるをえないのが現状である。

しかしながら、ハイパーメリトクラシーの議論で本田由紀（2005）が指摘したように、コミュニケーション能力は相手や場面で要求される規準が変化し、学校教育的なカリキュラムに収まりにくい性質のものである。その分、家庭の文化や地域の社会関係など日常的な慣習行動によるセンスの形成に左右されやすいともいえる。

そこで、今日急速に「社会的スキル」と称される認知行動療法などに起源を持つ行動パターンの模擬的な学習が試みられるようになっている。ＳＳＴ（ソーシャルスキルトレーニング）を代表として、アサーションプログラムやエンカウンターなど、具体的な問題場面を想定してロールプレイやリフレクションあるいはプレゼンテーションの活動を体験させる試みである。

グループへの参入スキルや共感スキル、主張スキル、あるいは問題解決スキルなどが育成できるとして、イギリスではＰＳＨＥ（健康教育）の正課としても導入されており、わが国でもいじめ問題の解決を図る目的で始まり、現在では学校などで新入時教育やキャリア教育など広範に活用されている。

だが社会的スキル学習には、個別な技能に還元されやすいコミュニケーションの理解を懸念する声や他の社会場面にも汎化するという理解への疑いなど、「心理主義化」への疑問が付きまとっていることも否定できない（伊藤茂樹 2005）。また、指導者の裁量によってスキル学習が、当初の理論とは異質で非常に多様な内容を含み込んで展開している実態を指摘する研究（木村祐子 2010）も数多くある。

いいかえれば、スキル学習は、どのような指導者にも可能なコミュニケーション能力育成の定型化した方法を提案できると同時に、特定場面で起きる偶発的なコミュニケーションへの参加の重要性を軽視させてしまうという課題も抱えてきた。対人不安を抱える若者への容易な教育的処方箋となる一方で、現実社会における複雑な対人関係への活用に困難を生み出しやすいともいえるのである（古賀正義 2013、2014）。

本研究では、エスノグラフィーの手法によりながら、非行傾向の少年やひきこもり系の若者（ニート等）、あるいは教育困難高校の生徒・卒業生・中退者など、広範な意味での「困難を有する若者」に対して試みられてきた社会的スキル育成の実践活動を取り上げながら、そのプログラムの特質や意義、あるいは参加する若者や指導者の理解や評価、さらにはこれらに参加しない・できなかった層の課題などを分析していくことを試みた。

結果的に、研究期間の３年間（成果報告書刊行にさらに１年間）で、多様な機関や若者に対する横断的な調査によって、「包摂のための社会参加」への実践的なアプローチを探る基礎的な資料や知見を分析できたと考えている。

３．研究の対象・方法

調査の主な対象となったのは、調査課題に適した条件があった首都圏や東北で何らかのスキル学習などに取り組んでいる「教育困

難高校」６校（東京５、宮城１）と、そのうち２校の卒業生。また、非行傾向を抱える若者が教育を受ける首都圏の「児童自立支援施設」およびアメリカ・カリフォルニアにある「ティーンコート」。さらに、ひきこもり傾向を抱える若者に援助をしている「NPO 団体」、東京および宮城・山形・秋田（カタリバ、わたげの会、プラットホーム、コミット等）、であった。

まず、各施設で実践されている社会的スキル学習の特質を文書資料や聞き取り調査、直接観察調査などから把握した。事前に理解していたように、３種類の施設・高校では、若者の活動における困難性の理解がそれぞれ異なり、エンカウンター／ＳＳＴ／教育相談について実践の力点がおかれ、また職場体験やボランティア活動等（中間的就労を含む）によるコミュニケーション機会も散見された。

初年・2 年目には、主に首都圏の困難高校と矯正関連施設、NPO 団体で社会的スキル学習として実践されているプログラムに関する行政的なおよび施設内の資料を収集・閲覧し、記録化した。また、その実践の一部をフィールドノーツにとりながら観察し、許諾の得られる範囲でビデオ撮影した。さらに、学校・施設の指導者や管理者、受講した若者に対して聞き取り調査も実施した。これらの正確なトランスクリプトも部分的に作成した。実践の実情を概括的に把握し、各施設のスキル学習の特徴を理解しつつ、リサーチクエスチョンの生成と精緻化を図った。

また、２から３年目には、地方都市・海外の学校・施設においても同様な調査を試みた。主に訪問・聞き取りによる調査を実施し、リサーチテーマがより明確になり、焦点化した短期間での研究を実施できた。

このように内部での観察と聞き取りを活かした「エスノグラフィックな質的調査研究」という方法を導入することで、若者当事者自身の社会的スキル認識にいかなる変化が生じたのか（あるいは生じないのか）を理解でき、彼らの対人関係の構えにどのような社会的改善の兆しがみられたのかに接近し分析することができた。

４．研究成果

これまで困難系の若者の社会的スキル不足が批判されることはあっても、その変化・改善が実証的な分析対象とされることはほとんどなかった。欧米の施設では、ロールプレイやディベートなどプラグマティックな方法の活用が多く、むしろわが国のようなケアリング中心の支援活動は珍しいといわれる。だが、指導者の専門性が充分でない日本の諸施設や学校で、「スキル学習」と称されるものがどのように展開され受け止められやすいのかを今回総括的に把握することを試みた。

同時に、ネット利用などコミュニケーションが多元化している現状では、実践活動を把握しつつ、若者の思い描く対人関係のイメージとその揺らぎ自体を理解する必要があることもわかった。その点で、自己物語の構築過程こそ重要であると考え、「スキル学習」の成否がこうした認識論的な視点からも分析された。

具体的な成果を３点からみたい。①困難高校の現場あるいはその後の進学・就労先で広義の「スキル学習」を受けた経験のある若者、あるいは中退等によって受けた経験のない若者への聞き取り等による実態調査、②米国青少年育成組織・ティーンコート等が行っている非行傾向の若者への実践の観察・聞き取り調査、③ＮＰＯ団体等が行っている社会参加の必要な若者へのスキル学習のファシリテート活動の観察・聞き取り調査、である。

簡略にそれぞれの結果を示せば、以下のようになる。ここでは、あくまでも簡略に、代表的な事例から説明しておく。なお、成果を報告書にまとめて整理し、主要な育成機関責任者・研究者等に送付した。

① <u>困難系若者の高校関連調査</u>：

教育困難校の在校生やその卒業生、中退者など、困難を有する若者自身に、彼らの経験知に基づく「ソーシャルスキル」（ＳＳ）の内容やイメージを物語ってもらい、こうした当事者の認識と教育諸施設指導者の理解とりわけ実践での強調点の語り方との比較対照を行おうと試みた。実際のインタビュー調査やその文字お越しデータ等の分析によって、概ねそのねらいが達成できたと評価できる。

例えば、困難校卒業生の事例でみると、現在キャバクラ嬢となった女子卒業生のマナー学習の体験が興味深い。彼女は、高校在学時に看護師を希望していたが、成績や出席の状況が芳しくないこともあり、医療秘書の専門学校へ進学することになる。

そこで多くの時間学ぶことになったのは、患者への接遇を良くしマナーを守って振る舞うことに力点を置いた対人的な秘書教育だった。お花の生け方やお茶の作法を初めとして、きちんとした座り方や話し方、笑顔の対応などを訓練することになる。こうした学習が、秘書にとってはごく普通の常識であり、病院では大事な対人関係の課題なのだと思って学んだという。

しかしながら、実際に入った病院ではこの学習は短絡には役立たず、むしろいじめ問題を生み出すことになってしまう。「いやあ、あたしこういう顔（の笑顔）なんですけど、みたいなと思って。なんか社会に出てそういうこと（いじめ）あるとは思わないっていうか。なんか不思議でしたね、すごく。」

職場の状況に合わせたマナーや態度がとれないという新たな問題が、かつてのスキル学習の意義を低下させ、不安を増殖させることになっていった。この事例では、学習の大きな課題は、能力以前の自己肯定感の弱さや

スキル不安自体の存在にも宿っているといえた（古賀正義 2012、2013、2014）。

こうしたケースは数多い。例えば、卒業後一旦は正社員となりながら、さまざまな職種での離転職を繰り返すＢ君の事例も紹介しよう。

聞き取りでは、高校から推薦された、初職である「正社員就職」の意味が過去遡及的に変容していることがわかる。高３調査時では、面接試験だけで合格でき、進学希望がなかった彼にとって、好きな車やバイクに触れられる「とりあえずいい仕事」（とっかかりの進路先）として位置づけられる。「技術的能力を向上させる対人スキル」が重視されている。

２回目調査時では、デートしたい土日にも入る仕事のシフトや昇給しない尊敬する先輩の給与など、職場の実態と照らして「やり続けても未来のない仕事」と評価される。しかし同時に、避けようと思ってきたフリーターの兄のようになることも懸念され、不安も語る。職場では思いのほか、対人的な「スキル」や「マナー」が大切だったと思い返している。

３回目調査時では、転職した新車販売のセールステクニックの不足が「重い接客」の例として語られ、ガソリンスタンドでできた接客の職能への自信と対比される。最初の軽い接客の仕事が「対人スキル」や「マナー」のレベルがそれなりに高いことを評価させる。

４回目調査時では、意思決定でき配達中心の生協の仕事との対比から、初職は「自己判断できない管理された仕事」とみなされる。「自己判断できる対人スキル」という見方が示されていく。そこで初めて、ビールを注ぐや名刺交換するなど新たなスキルとしての「ビジネスマナー」の大切さが強調されるのである。

このように、高校時から教育実践を通して思い描いた最初の仕事体験が、その後の仕事と対比され読みかえられ、彼なりのスキルの判断基準が構築されている様子が読み取れる。また「社会化」や「現地化」が生じて、スキル理解の意義を変えていくこともわかる。

② 矯正教育関連施設等の調査：

次いで、日米の矯正教育諸施設（自立支援施設とティーンコートＴＣ）でのＳＳ活動の違いを比較しながら、文化的な背景に依拠したＳＳ活動理解の違いと実践における強調点の差異を分析することを試みた。特に、非行処遇にかかわるＴＣ参加の若者の議論の過程はこれまで秘密にされていたが、データ取得の許諾がおり、関連データも入手でき、結果を分析することが可能となった（古賀正義・学会発表 2013）。

参加する若者相互のスキル能力問題理解の違いを意識させる方法論を利用することによって、指導者が場づくりに介入・支援し、マニュアル化された学習を越える実践の多様性が生じるケースがあった。ディベートを含んだ参加形態により、個人化されたスキル学習のイメージが変容することがあり、特に、支援団体の実践では顕著にその特徴がみとめられた。

例えば、ＴＣに参加したＰ君の語りが参考となる。盗みで被告となった経験がありながら、彼はオークランドで現在ＴＣ活動のリーダーになっている。参加の動機や経験の意味などについて聞くと、「更生義務」（ＴＣ傍聴や奉仕活動などの処罰の活動をさす）で多様な人種の仲間と出会い、グループ活動の面白さや公正な非行審判への興味などを抱くようになったという。とりわけ、自分が授業エスケープとみなされ理不尽に補導された過去の体験から、被告になった非行少年の話を正確に聞き弁護することに意欲を持つようになった。

彼のように、ＴＣに来て高校の枠を越えた多彩な友人相互の絆を初めて感じた、大人のスタッフと話すようになったなど、公的な場でのプラグマティックな「社会化」の有益さ、裁判過程を通したスキル学習の有用性が語られることもある。

「ええ。だから、私にとっては、コートというのはちょっと違う意味があったんだと思うのです。「ちゃんとした」裁判システムがあることが、地域のみんなにとって大切だと思っているんです。でも、高校に入りたての年齢では、自分のようにわからないことも多々あるから、いやなことにも出会ってしまう。裁判を通して、利害の葛藤や現実の歪みを考えること（学習）が必要なんです。」というのである（古賀正義 2015）

③ 支援諸団体（ＮＰＯ団体など）の実践：

さらに、心理学手法にそのまま依拠する事例とそれを加工してディベート等を加味して現場に即して文脈に応じた実践をするケースを区分しながら、現場での参加者と指導者の行動観察を行って、ファシリテートの違いとその影響をＮＰＯの活動から分析する試みをした。映像データの整理と音声部分の文字化がある程度可能となり、概ねねらいが達成できたと評価できる。

例えば、困難高校出身でオタク型・引きこもり型の若者Ｏ君が困難な社会参加を語る事例は興味深い。彼は、現在、親の勧めもあり、ＮＰＯで活動しつつ、職業能力開発センターに通って学習しているが、そもそも、専門学校での就学も、またアルバイトとしての就労も思うように続けることができなかった。

彼のように、ニートに関する論者が指摘してきたような、職場で必要とされる大人世代とのコミュニケーションのギャップに苛まれる者は少なくない。自己の狭いネットや趣味（コミックマーケットなど）の世界に閉じこもる困難高校生では、正規の就業はおぼつかなくなっていた。しかしながら、実際彼らにとってたびたび問題視されるコミュニケーション能力の欠如や改善が切迫して感じ

られることはほとんどなかった。むしろ就業先から提起された「職務の失敗の原因」として挙げられるだけであり、一方的な指摘としてやり過ごされることも多い。
「いつ結論出るんでしょうね。・・もしくは趣味の延長でそこからどっか、なにかいい仕事が見つかればいいなというのはたまに、ありと、思いますけど。」
　この会話で問題とされているのは、就業の繰り返しの失敗＝離職という結果→社会関係の取り結べなさや能動的なコミュニケーション能力としてのやる気を発信することの不足＝離職を生む原因、といった理解の構図だけである。これ自体が離職結果からの遡及的な解釈にすぎず、同時に彼にとっての「甘くない世の中」や「趣味の対人関係との違い」を体現する出来事の現れとして発言されている。
　自分の大切にする仲良しの世界（時に、癒され励まされる仲間とのセラピー的な世界）との違いが強調されるのであり、社会とのギャップは埋めがたいものであると捉えている。すでにみたように、情報やサービスに特化した就業構造の現状からいえば、実態はともあれ、柔軟なコミュニケーション能力やマナーの慣習は職業技能の中核にあり、職場などでの社会適応を保障するものでもあるとみられるのだが、そのようにスキルが理解できないような、彼らにとっての「社会」の固く重いイメージがあるといえる（古賀正義2011）。
④　まとめと成果・課題：
　若者が疎外されやすい社会の対人関係的な構造が今日容易に変わらないとすれば、困難な支援課題ではあるとはいえ、学校教育やＮＰＯの活動にスキル化した適応能力の育成、とりわけ、理不尽なストレスへの耐性や自発的な発言力などの課題の遂行をはかることを求めざるをえなくなってくるだろう。
　こうした動向に過敏に反応し「スキル不安」に入って防衛的になる若者がいる一方で、「スキル戦略欠如」の過剰な自己肯定感を抱え続け社会参加できない者もいる。ここに、スキル学習をより社会化し対象者を広げていくべき社会認識上の課題がある。
　各々のフィールドにおけるリサーチクエスチョンの実証を進めながら、得られたデータの整理と分析をすることによって、今回一定の成果を得ることができた。また、国際学会を含む学会での研究発表を引き続き行い、雑誌や書籍への研究論文の執筆も行うとともに、最終報告書（総ページ数 787 頁＋386 頁）の作成を行うべく努力し、完成した。
　以上のことから、全体的には順調に調査分析が進行し、研究コミュニティでの深い分析が進んでいったといえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 14 件）＊８件のみ掲載

① 古賀正義、アメリカ　格差社会を生き抜く―困難を抱える子どもの事例から、『児童心理』、査読無、第69巻３号、2015、54-61
② 古賀正義、都立高校生の進路選択過程に関する継時的研究―困難地区の進路多様校や特色校等を事例として、中央大学『教育学論集』、査読無、第 57 集、2015、13-42
③ 古賀正義、液状化するライフコースー都立高校中退者調査からみた中退問題と支援、早稲田大学社会学会『社会学年誌』、査読有、第 55 号、2013、3-18
④ 古賀正義、「若者支援の「スラックティビズム」を越えていくためにー当事者研究と支援の社会学へ向かって、日本子ども社会学会『子ども社会研究』、査読有、第 19 号、2013、21-34
⑤ 古賀正義、「思いやりを育てる環境」の危機を問う、『児童心理』、査読無、第67巻10号、2013、１－９
⑥ 古賀正義、ソーシャルスキルとは何かー困難高校卒業後の就職をめぐるエスノグラフィ、『現代思想』、査読無、第 41 巻５号、2013、132-142
⑦ 古賀正義、困難を有する若者たちが語る「ソーシャルスキル」―教育困難校卒業生追跡調査８年目の結果から、中央大学『教育学論集』、査読無、第 55 集、2013、89-121
⑧ 古賀正義、ひきこもりとその家族の社会学的研究－『ひきこもる若者たちと家族の悩み』調査の結果から、中央大学『教育学論集』、査読無、第 54 集、2012、１-30

〔学会発表〕（計１７件）＊５件掲載

① 古賀正義、液状化するライフコースと「ソーシャルスキル」－困難高校卒業生追跡調査８年目の結果から、日本社会学会（第 86 回大会）、2013 年 10 月 12 日、慶応大学
② 古賀正義（1 番目）、牧野智和、「進路選択」はどのようになされているのか―調査からみた都立高校中退者の意識と行動、日本教育社会学会（第 65 回大会）、2013 年８月 29 日、埼玉大学
③ 古賀正義、Empirical Analysis of Juvenile Correctional Education in Japan: Through The Questionnaire of Juvenile Delinquent in Reformatory Centers、国際法社会学会（2013 年定例大会）、2013 年５月 31 日、ボストン
④ 古賀正義、「ソーシャルスキル」の語りからみた困難を有する若者たち―教育困難校卒業生追跡調査8年目の結果から、日本教育社会学会（第64回大会）、2012年10月27日、同志社大学
⑤ 古賀正義、「ひきこもり」青年を抱える家族の問題理解に関する実証的研究－支援団体参加家族への聞き取り調査

の結果から、日本社会学会（第 84 回大会）、2011 年９月 17 日、関西大学

〔図書〕（計７件）＊３件掲載

① 古賀正義、東信堂、「マナー不安」の時代―職場適応のスキルを物語る若者たち（加野編『マナーと作法の社会学』所収）、2014 年、64-106（全体 258 頁）

② 古賀正義、矯正協会、生活指導のメカニズム―集団生活に埋め込まれた個への働きかけを読み取る（広田・後藤編『少年院教育はどのように行われているのか―調査から見えてくるもの』所収、2013 年、85-108（全体 255 頁）

③ 古賀正義、学文社、「将来の私」を物語る－セラピー・カルチャーを求める若者たち（北澤編『＜教育＞を社会学する』所収）、2011年、127-154（全体262頁）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

ホームページ等

なし

６．研究組織

(1)研究代表者

古賀　正義（MASAYOSHI　KOGA）

中央大学・文学部・教授

研究者番号：９０１７８２４４

(2)研究分担者

なし

研究者番号：（なし）

(3)連携研究者

アンソニー・バレル（Anthony Villarreal）

カリフォルニア大学サンタクルーズ校、社会学科・特任講師（アメリカ在住）

研究者番号：（なし）